

ご苦労さん！大谷正夫君

杉本時哉（協同総合研究所前理事長）

5月26日、咽頭癌に苦しんでいた大谷正夫君が闘病の甲斐なくこの世を去った。

5月29日の通夜、30日の葬儀に連なりながら、彼の晩年の闘病生活を身近で見つめながら、どうしてもしてあげられない辛さを感じていた。彼と初めて会ったのは、1955年前後、当時東京都庁の地下にあった東京連の事務所。それ以来協同運動に全生涯を捧げた共通の友として、常に情報・意見を交換し、親密の度を加えた。私が労働金庫に移った後も、労金での私の同僚が彼の奥さんになる縁もあって、より新密度を加えた。

大学時代から希有の語学好きで、彼が10カ国以上にのぼる言語に通じていることはよく知られている。それには彼の天賦の才というだけでなく、限りない好奇心と研究心、努力が積み重なっている。言語音痴で不勉強な私は、ずいぶん彼に助けられた。

私が労金を引退し、彼も日生協の第一線を退いてから、私は彼に協同総合研究所の副理事長への就任をお願いした。以来労協連や協同総研の国際活動で彼がどれほど活躍してきたことか。咽頭を酷使する通訳や休む暇ない翻訳が、彼の病の進行を早め、まだ若すぎる命を縮めたのではないか？そんな悔やみに似

た思いがかすめてならない。

労協運動への私の傾注の動機は、レイドロウの「西暦2000年の協同組合」、モスクワ大会の直後に大谷君がバスク・モンドラゴンを訪ね、その報告を聴かされたときに始まる。私はその彼の報告を労働者福祉研究会で3度にわたってお願いした。これが日本で最初のモンドラゴン・レポートだったし、中西さんたち当時の事業団指導部が労働者協同組合を目指す動機の一つともなった歴史を思わずにおれない。

癌の発病・最初の入院のおり、元朝日新聞の岩垂さん(彼の平和ジャーナリスト基金にも関わっていた大谷君だった)と一緒に見舞いに行き、その後の2度目の入院で一旦は退院して経過が良好に推移とみて喜んでいた。協同組合学会の関東支部のILO勧告シンポジウムで苦しいかすれ声ながら積極的な発言をした彼の姿が思い出される。再々入院後は見舞いも叶わぬまま彼の最後の知らせを聞くことになった。私事だが5月初旬わたしの妻がくも膜下出血で突然倒れ、幸い早期の手術で一命を取り留める事情となり、彼の死と妻の生還に感慨深い思いに駆られている。今は彼の冥福を祈り「ご苦労さん」と心から労いの言葉をかけたい。同時に協同労働の協同組合法制の実現と定着を、そして彼と共にした平和と民主主義・協同社会の実現への志を引き継いで、私自身の残り少ない余生を精一杯生き抜くことを霊前に誓いたい。